【第 14 回】銚子スポーツタウンコラムプロ野球戦力外通告　木樽 正明

戦力外を決める舞台裏

ペナントレースが終わると１２球団から「戦力外選手」の発表が有る。これは、来期のチーム作りの一環の作業で、第一次、第二次で戦力外選手が発表となります。弱肉強食のプロ野球の世界では当前の事で、選手達も充分理解している所ですが、線上に居ると思われる選手にとっては戦々恐々の思いに違いありません。

裏話を少し話すと、戦力外選手を判定する為の「スタッフ会議」があり、私も長い間携わって来ました。１，２軍投手コーチ、２軍監督として現場の意見を、そして、スカウト部長としても。思えば２０年以上も関わって来た事になります。

判断材料として選手の能力は当然ですが、年齢、将来性、故障の状態、そして、練習態度、生活態度も評価の対象になります。プロ野球選手とは言え、勝手な行動、言動で和を乱すことは許されないからです。選手登録数は７０名で球団によって違うのは、１，２，３軍制を敷いている球団は育成選手も多く入れ替えが激しくなり、人数的にはドラフト会議の内容を考慮に入れ決められるのです。

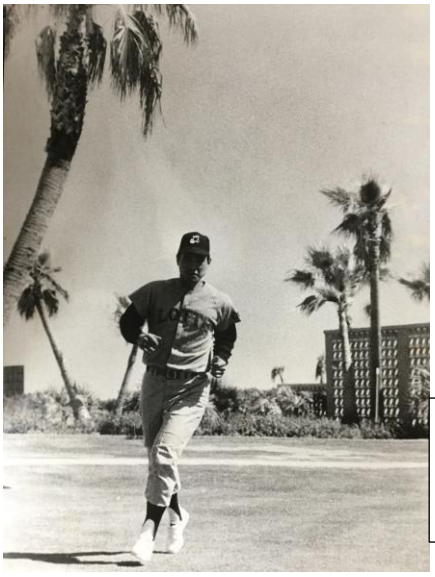
選手に寄り添う指導者の思い

編成部として来期のチーム作りの大枠の中で各部門別にリストが挙げられ、少しずつ絞って行くのです。この評価を出す者にとってもそれなりに辛いものが有り、２軍コーチ、２軍監督の立場で何年間も寄り添い指導して来て、当然、「情」も絡んで来るわけです。それだけに、日頃から選手達に言ってきたのは“戦力外選手にならないよう、充実した毎日を送って欲しい”と。又、スカウト部長時代に、自分がドラフト指名した選手が戦力外選手になるのは、口に表せない辛さが有りました。

夢をかなえたその先へ

こんな事が有りました。私が２軍監督時代に、春季キャンプで高校生新人選手の一人に動きに全く精彩がなく、故障でもしているのかとコーチに聞くと報告はないと言う。監督室に呼んで選手に話を聞いて驚いたことに“私はプロ野球の選手になるのが夢でした。その夢を達成したのです”だからもう充分だと。他球団の監督に聞いたら“俺のところにもそんなのが居るよ”しかし、これは例外的な話です。

厳しいプロ野球の世界で、一人でも多くの選手が成功してくれることを願って止みません。



現役時代

1971 年アリゾナキャンプ